

地域の「チカラ」スタートアップ

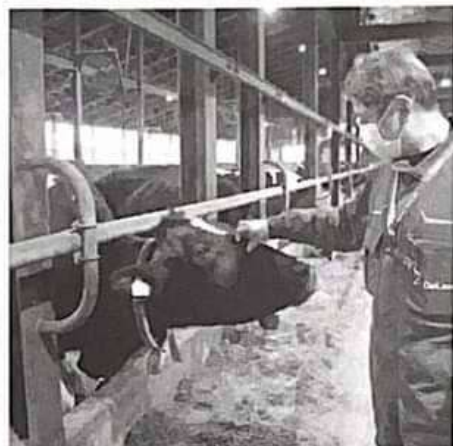
北海道で大規模に搾乳ロボットを導入し、酪農の自動化を進めた先駆者がカーム角山（北海道江別市）だ。徹底的な自動化とルール化で酪農家の集まりを企業として組織した。酪農家の集合体から始まった農業法人としては例がない新規株式公開（IPO）をめざす。

カーム角山は2014年に近隣の酪農家5軒が集まってできた農業法人だ。牧場は経営者が2、3世代目になると設備の老朽化が進み、設備更新の必要に迫られる。そこで壁になるのが資金調達だ。川口谷（かわぐちや）社長は「個人では億単位の資金調達は難しい。そのためには法人化が必要だった」と話す。

規模の利益を生かした費用削減や資金調達の容易さを見込み法人化に踏み切ったが、大規模農業法人（メガファーム）としての再出発には課題も多かった。約500頭を

カーム角山（江別市）

データ酪農でメガ牧場



搾乳ロボットの導入で、1頭あたりの乳量は年間3000kg程度増えた

FC展開へ株式公開検討

億円を投じて8台の搾乳ロボットを導入した。餌を求めて動き回る牛がゲートをくぐると自動で搾乳する。人が移動して1頭1頭に搾乳機をあてがっていたのとは違い、大きく効率化した。

個人農家が集まって大規模化をめざした事例はこれまでもたくさんあった。ただ意見や利害の対立などで成功しなかった例も珍しくない。

抱える大規模牧場になったものの、1戸1戸の牧場はもとも数十頭規模と小さい。数百頭に及ぶ牛を搾乳、管理するノウハウはなかった。

そこで目をつけたのがロボットだ。15年に約2

億円の安全管理のため製品HACCP（危険度分析による衛生管理）認証とJGAP認証も取得した。意見の対立を防ぐため感覚に頼らず明確なデータ、ルールのもとで農場を運営する。

こうした管理とルール化の効果は搾乳量にも表

カーム角山の強み
ロボットを導入し、搾乳などの作業を自動化
規模の利益を生かした資金調達や費用削減
農場HACCP認証やJGAP認証を取得し、作業をルール化

てストレスを抑えたのも効果的だった。ロボットなどこれまでに20億円を投じた。借入金返済はまだ続くが、搾乳量の増加などで経営は軌道に乗ったという。

次のステップとして見据えるのはフランチャイズチェーン（FC）展開だ。システム化された牧場経営をパッケージとして提供し、未経験の人でも酪農を営める仕組み作りを夢見ている。

「フランチャイズ展開のためには企業としての認知度や信用が欠かせない」（川口谷社長）としてIPOをめざす。目標時期を25年に定め、指導的な役割を務める主幹事会社を決めるなど準備を進める。北海道から新しい酪農の形を広めようと企業価値の向上にまい進している。

（荒川信一）